

## レビュー

主に一般公開されている作品や著作物等についての紹介・考察です。

### 豊島圭介監督、映画『三島由紀夫 vs 東大全共闘 50 年目の真実』、2021 年、TBS

映画『三島由紀夫 vs 東大全共闘 50 年目の真実』を観た。

他者をどう考えるかという問いに対して、三島は「私の大嫌いなサルトル」という言い方をして『存在と無』から最も猥褻なものは縛られた女の肉体であるという文言を引用し、エロティシズムと暴力の必要性について語っている。ここでいう他者というのは、双数関係にある他者ではなく、大いなる他者であろう。それを三島は天皇という。

他人を物のように扱うことの誠実さは他人の中に自分を見出さない、他者は自己の鏡ではない、という切断的態度の内にある。サディズムは自分と似た他者を切断する行為によって虚無を回避し大いなる他者を現出させようという涙ぐましい努力である。三島は映画の中でも言っているように、その他者は天皇である必要はなかった。本来的になんでもよいが、卒業式で時計をもらったときの天皇はとてご立派だった、そういう個人的恩顧が三島にはあった。

三島の学生への問題提起は、物と持続についてであった。机は本来の使用用途とは別の扱いを受けることがある。たとえばバリケードのように。究極的には何者でもないことは可能なのか、という問いである。革命が本来の使用用途や存在様式から離れることであるとして、それを持続させることは原理的に可能なのか、ということである。成功するかどうかは問題ではないと言ったときに無自覚であるのはどういった点か。それは何者でもないということとは不可能であるということだろう。常にすでに、人は何者かになってしまっている。同時に物はある眼差しの中でそれが本来的とよび得るか非本来的とよび得る在り方かどうかによらず何物かであってしまっている。

学生たちが他者と思しい権力と対峙するなかで、三島の問題意識は他者がいないこと、大いなる他者が不在であるということにあった。だから三島の学生に対する問いは、転覆した先の他者をどう担保するのか、ということでもあっただろう。というより、他者は大なり小なりおらずにはおれないものではあるが、君たちのそれは私が天皇と名指すものに匹敵し得るものなのか、どうなのかということだろう。大澤真幸は『三島由紀夫 ふたつの謎』

の中で三島の原点、出発点に「一の内的不可能性」があったということを書いている。少し引用する。

こんなふうに関いを立ててみよう。もし究極の真実が『豊饒の海』の結末が示唆しているように、容赦のない虚無であるならば、つまり「0(ゼロ)」であるならば、どうして何かが、世界が存在するのか。

究極の真実は、虚無、つまり「0」とは異なる何かではないか。見まぢがうほどによく似てはいるが、「0」とは異なる何かではないか。それを、ここでは「一の内的不可能性」と呼んでおこう。…

私は学生の頃、戯れに $0\infty$ システム(ゼロ無限システム)というものを考えたことがあった。虚無であるところの人と無限大であるところの絶対的存在からキリスト的一が析出し得るという信念に基づく体制をそう呼んでみた。 $0\infty=1$ は可能性の海であるが、それは幻想に過ぎない。このシステムは人が限りなく0か無限大に近づくことで有1であるところの1を体現できるという信念があって初めて駆動するが、実際にはこの1は遡及的にしか見出されない代物であるが故に不可能である。

$0\infty=1$ の地平で闘っても資本主義やキリスト教は乗り越えられないということをおそらく三島は自覚していた。 $0\infty\neq 1$ と否を叩きつける存在を三島は強く求め、その存在として天皇を選んだ、ということではないか。

三島は自我が極端に肥大し風景の隅々にまでそれが侵食したような小説を書く一方で、自我を極度に希釈させてみせるような試みもする、その所作はゼロと無限の間を焦慮に駆られながら気忙しく振幅しているようにも見える。

私たちは常にすでに1であり、そこから逃れることはできない。何ものでもない在り方や何ものでもある在り方を求めることはシステムにとっては織り込み済みの行為であり、それこそが資本主義の糧となっている。私は何ものでもないとか、何ものにもでもなり得るという態度は、だから態度として至極「合法的」といえる。三島がいう非合法的暴力は0でもなく無限大でもなく0を反転させた形での無限大でもなく無限大を反転させた形での0でもなく、それらのスペクトラムとは全く無関係に有無を言わず新たに1を穿つ行為のことではなかったか。それが三島の小説においても実際の行動においても成功しているとは思えないが。

基礎に立ち返ると、1 はやはり穿つものではなくすでに穿たれたものとして立ち現れる。あらゆる、多様な 1 が可能だが、穿つことはできない。それと知らずに 1 となっている、活動とはそういうものではないか。1 を目指すことはできないし、そもそもその目指す行為は意図せずその人を双数関係へと導いてしまう。

ジジエクは平等と認識される正義は妬みの上に成り立っているという(スラヴォイ・ジジエク『パンデミック2 COVID-19と失われた時』)。能力に応じて働き、必要に応じて受け取る、ということは平等主義とは異なる。問題なのは序列や格差が自由や平等の名の下にうまれていることだろう。三島は持続を問うていた。それは机をバリケードたらしめる行為者への責任を問うことでもある。たとえば、あなたたちはバリケードであると言った場合、その眼差しが持続しないのであれば机は絶えず名指すものの顔色を伺っていなければならない。持続しないこの暴力は三島の言葉を借りれば合法的な暴力ということになるだろうか。織り込み済みの暴力である。ベンヤミンの説いた神話的暴力(法維持的暴力、法措定的暴力)と神的暴力の分類でいうと、機動隊の暴力は法維持的暴力で学生の暴力は法措定的暴力にあたるだろう。三島はそれとは別の神的暴力を発動させたかった、のではないか。

それは天皇である必要はなかったと三島は言う。私は近所のおじさんでも NPO でもいいと考えている。おじさんだろうが NPO だろうが気づいたら 1 になっている、ということがあるだろう。

(2021/06/14)

### 龍膽寺雄、『焼夷弾を浴びたシャボテン』、平凡社、2020 年

褒められぬ。

人から求められぬということはつらいことである。

子供じみた悩みといえそうだが、人間はすべからく子供じみていることは八十、九十歳の人々を見れば容易に気がつくことだ。

自力でなんとかするというのは虚構である。

虚構であることを若いうちは思わぬから、歳をとったあとに余計に子供じみてくる。

歳をとってから、死ぬ直前に、自力が虚構であることに気づくよりは、若いうちから己の無能に苦しむほうがましである。

己の無能に悩むことは、生まれてからずっと続く生き地獄である。

己の無能によって、まわりに理解されることは無理である。まわりに求められることも無理である。まわりは己の無能を憎み卑しむ。だから己をまわりから自ら截断し、閉じこもり、あほになる。

龍膽寺雄は戦前戦後の作家である。

塗炭の闇のなかにあってサボテンのことばかり考えていた作家である。

文章がうまい。

「仕事という仕事は、—小説書きでも、学問や研究でも、金儲けでも、人間臭さの中でおこなわれる。このようにして世に生きて、自分のはき出すハナ持ちならぬ臭気に自分で背を向けたいからこそ、ひとり静かに植物の一と鉢もいじってみたくなるのだろう」（空想独楽）

大変前向きだ。世間をうっちゃってサボテンを育てることほど前向きなことがあるだろうか！

怠け者の墮落と前向きな行動とは紙一重である。

自力が虚構であることを知るものは道楽に走る。

道楽に真摯になれば道に至る。

道に至れば人間は満足である。

修羅は絶滅せよ。龍膽寺雄に誉れあれ。

道楽を邪魔する魔障は調伏されよ。

空谷子しるす

(2021/06/16)

**ピーター・スコット-モーガン、『NEO HUMAN ネオ・ヒューマン: 究極の自由を得る未来』、東洋経済新報社、2021年**

久しぶりに実家へ帰ってきた。前回来たのはもう一年以上前になる。玄関にはピンクの柵が立てかけられており、来客は柵を跨がないと入れなくなっている。それはもう十年以上も前からずっとおそらくそのままだった。犬が二匹おり、柵をしておかないと庭に放したときに、玄関を抜けて全速力で駆け出してしまうから。家の前には田園が広がっており、1km くらい先までは見渡せるかもしれない。犬が逃げたらすぐに見つかることが多いが、田んぼの反対側はすぐに道路になっているため、反対側へ向かうとはねられてしまう危険も高い。犬がまだ小さい頃はよく脱走して、皆で探し回ることもあった。最近そういう話は聞かない。もともと三匹だったが、昨年白いトイプー

ドルが老衰でなくなり、茶色いトイプードル二匹となった。

来客はピンクの柵を越えるか、横の駐車場から中に入るしかない。内玄関までは石畳となっており、左側には中庭のような空間がある。芝が生い茂って、ずっと立ち入ることも難しいくらいだったが最近人工芝をそこに被せてゴルフの練習場にしたらしい。球を数メートル先の的へあてる程度の簡素なものだが。

次女が来るのは初めてだった。母を見ると辛そうな顔をして泣き妻を手探りで求めた。長女は初めてではないが、だいぶ久しぶりのことでかしまっていた。長女は4歳、次女は1歳になる。ここへ来る数日前から長女は妻の実家へ滞在していた。妻の母が京都まで迎えに来て新幹線で連れて帰ったのだった。長女はホームシックにかかることもなく毎日楽しく過ごしていたようだった。妻の妹の子供が二人おり、プールをしたり自転車に乗ったりして遊んでいた。長女はまだ自転車には乗れなかったが交通公園で練習して補助輪付きだが一日で乗れるようになったとのことだった。

私の実家に来た長女は姪っ子と別れがたかったようで、彼女のところへ帰りたいたと泣きながら訴えた。私の実家にもあと2、3日で姉の子供たちが来ることになっていたが、今は周りも大人だけということもあり姉の子供たちが来るまでは子供たちと妻は妻の実家で過ごすことになった。

ピーター・スコット・モーガン『NEO HUMAN ネオ・ヒューマン：究極の自由を得る未来』はまだ予約の段階で姉に教えてもらってamazonで購入した。車の通勤中に2/3くらいは読んでいたが、残りを一人になった時間で読むこととなった。ピーターはALSに罹患した。経歴や粗筋は調べたらすぐに出てくると思うので割愛する。端的に言うと、ピーターは人間とAIとの融合を目指している。人間としてのピーター、つまりピーター1.0からサイボーグとしてのピーター2.0への変容を遂げること、そして人間の生物としてのピーターの死後はAIのピーター3.0として生き延びること。2.0は現実の世界を生きながら、仮想現実としての世界も同時にVRのゴーグルをつけることで生きることができる。そこでは五体満足で魔法さえも使うことができる。2.0はまた現実の世界に遍在するようになる。生物としてのピーターがどこにしようと、2.0は講演会を複数の場所で同時に別の言語で行い、存在することができる。AIはピーターと融合しているので、ピーターというアルゴリズムを学習してどこにでも同時に存在し応答できるようになるというわけだろう。

私はまだ観たことがないが AI とかバーチャルリアリティといえば映画のマトリックスを想起する方もいるだろうか。私はこういう話を聞くとつい 90 年代後半に放映されたアニメ『serial experiments lain』（1998 年）を思い出す。レインは現実の世界とワイヤードというコンピュータネットワークの世界に遍在する。現実の世界と仮想現実を往来できるのはそもそも人間が発する電磁気によりコンピュータの端末として中継となれるからである云々といった話だったと思うが、すでに子供の頃の記憶なので曖昧である。

ピーター2.0 が目指しているのはレインなのだろうか。AI の予測変換の究極は意識の共有だろう。それが伝達速度としては原理的に最も速い。Wired Brain についてはジジエクも言及している。その是非はわからないというか、機械と脳を接続することは今後何かしらの形で可能になるだろうしその流れを止めることもできないだろう。そして Wired Brain なり AI と人間/脳の融合が普及すれば確実に倫理の再構築も求められる。というよりも今からすでにその時に備えておく必要があるだろう。

すでに現実となる前からピーター2.0 を受け入れる下地はできていた。Google に代表されるインターネットサービスはモニタリングし個々を繋ぐことで自他の境界や絶対的他者の存在を不明瞭なものとし、レインの世界観の基底にある集合的無意識とかユング的世界観に傾斜していくポテンシャルがある。

問題はそうしたときに如何に他者性や責任を担保していくか、ということだろうか。ピーター2.0 や 3.0 は何も新しい問題ではない。人と簡単に繋がることができるようになったということは、繋がらずにおくことが難しくなったということで、卑近な例では携帯電話が普及したおかげで仕事がサボりづらくなった、もっと遡れば車が普及したおかげで労働に従事する時間が増えてしまったということでもある。テクノロジーと接続は切っても切れない関係にあるかのようだが、切断のテクノロジーのことも今後はもっと考えていく必要があるだろう。単に個人の選択で twitter をしないとか facebook をしないとかいうことではなくテクノロジーの次元で接続解除するということ。

自宅の本棚にはもう 10 年以上前に購入した本が無造作に並んでいる。本は色褪せる。中身の問題ではなく、物理的に文字通り色褪せ埃に塗れている。電子書籍やバーチャルリアリティは古くならないことができる。

実家の引き出しに指輪が入っていた。内側の刻印を見てもうすっかり忘

れていたが、2007年に作製されたものらしい。もともとシルバーのリングだったのだろうが、今では錆び付いて黒々としている。子供たちはまだ帰ってこない。体操教室に連れて行ってもらっているらしい。妻の電話の向こうで笛の音と子供たちの声が聞こえる。犬はいつものようにリビングのソファでうたた寝をしている。

(2021/07/30)

**安野侑志・高田真理、『世界一の紙芝居屋ヤッサンの教え』、ダイヤモンド社、2024年**

ヤッサンは紙芝居屋さんで今は息子さんのだんまるさんがその意思を引き継いでいる。この本自体は弟子の始穂さんがお師匠の言葉を集め、教えとしてまとめたもの。

教えのいくつかを以下に書き留めておく。

一所懸命やる

「心構え」ではなく「心が前」で臨む

話し合いではなく話試合、まるくおさめるんじゃなく三角におさめていく  
過ぎなければ及ばざるが分からない。行き過ぎたら、ちょっと戻ればいい  
しょうもないことをたくさん言え日記ではなく日死。一日の葬式、心のオシッコとして書く。一日一日生まれ変わるため

8時間の「自分時間」を確保する

蟻の一穴をあちこちからあけておけばいい。機が熟する、そのときまで  
真愛(間合い)。本当の愛というのは相手に伝えるために間を空ける。相手を  
気遣い、相手の様子を一瞬確認すること

変でもいい。変なものが出てこない、ずば抜けて面白いものは作れない

9歳の年輪を残した「おとな」になれ。年輪を響かせて、そこから新しいものを生み出していく

世の中そんなに辛く(からく)もない

やりたいことをやるには、いかに「やりたくないことはやらない」でいられるかに尽きる

今日一日をどれだけ大きく喜べるか。今、この瞬間を生きて、未来への「未知の道」を進むのだ

「話し合いではなく話試合、まるくおさめるんじゃなく三角におさめていく」あたりはオープンダイアログにも通じるものがあると思った。

日死、心のオシッコは私もしてみようと思ったが、怠惰ゆえにできないかもしれない。

間合いでなく、真愛。その一瞥、一瞬のまなざしに真実の愛を感じる。

しびれます。

(2022/05/06)

### ジャン・ルノワール監督、『ピクニック』、2016年、ポニーキャニオン

皆さんご存知かもしれませんが、ラカンの奥さんは、バタイユの奥さんでした。バタイユの奥さんは、ジャン・ルノワールの映画に出たことがあります。ジャン・ルノワールは、有名な画家オギュスト・ルノワールの息子です。

バタイユ-ラカンの奥さんは、息子ルノワールの中編『ピクニック』で主人公を務めました。

この映画、ロケの途中で悪天候に見舞われ、未完成に終わり、そのままお蔵入り。撮影済のフィルムはナチスに没収されてしまいます。

戦後、シネマテークフランセーズの館長とプロデューサーがフィルムを集め、ルノワールの承諾を得て、作品を完成させました。ルノワールは作品の完成に寄与しませんでした。出来上がった作品はルノワールの傑作のひとつに数えられています。

そんな、生みの親が何人もいるような作品『ピクニック』には、父親ルノワールの印象派時代の作品とほぼ同じ雰囲気、同じ構図の場面がいくつもあります。

バタイユ-ラカンの奥さんが演じる主人公は、父親から欲得ずくの結婚を強いられ、心の内には娘なりの欲望を抱えています。この娘が家族と一緒にパリ郊外にピクニックに出かけます。明るい陽射しが降りそそぐなか、地元の若者にナンパされ、朗らかな時間が流れるのですが、悪天候によって物語が一変します。

家族、欲望、悪天候、現実と虚構と、ラカン派の精神分析が飛びつきそうな作品ですが、単純に作品としても素晴らしく、バタイユ-ラカン夫人の存在感も評価が高いです。数年前にデジタルリマスターされました。こんだけ書いといて何ですが、僕は未見です。笑。

(2022/05/24 す)